



現場から進める医療DXと働き方改革

豊橋市民病院 事務局 医療情報課 | 原瀬正敏

高齢化社会を迎え患者が増加する中、医療現場では業務の複雑化と負担増加が深刻化している。現場主導による医療DXの推進と、クラウド化、省エネ機器の導入などを通じ、業務効率の向上と職員の負担軽減を図りつつ、働き方改革と環境配慮を両立するサステナブルヘルスケアについて考察する。

As the aging population leads to an increase in patients, medical workplaces are facing growing complexity and heavier workloads. This article discusses a sustainable healthcare approach that balances workstyle reform and environmental considerations through field-driven digital transformation (DX) and the promotion of cloud-based systems, introducing energy-efficient devices, and improving operational efficiency, it aims to reduce staff burden and enhance overall performance.

はじめに

日本の医療現場は、高齢化社会や医療ニーズの多様化に伴い、慢性的な長時間労働や煩雑な業務といった課題に直面している。これらは医療従事者の疲弊を招き、ひいては医療の質の低下につながるリスクを内包する。こうした状況を打開し、持続可能な医療提供体制を構築するためには、デジタルトランスフォーメーション (DX) の推進と、それに伴う働き方改革の実現が不可欠である。さらに近年では、限られた人的・物的資源の効率的活用に加え、環境負荷の軽減と資源循環も視野に入れた「サステナブルヘルスケア」の考え方が注目されている。

本稿では、「現場主導のDX」に焦点を当て、医療従事者自らが主体的に関わる意義と、サステナブルヘルスケアの実現に向けた具体的方策について述べる。

現場から進める医療DX：改革の第一歩は現場の声

医療DXの推進にあたり、しばしば直面するのが、現場との温度差である。経営層やIT部門が中心となって進める改革では、現場のニーズや業務フローと乖離したシステムが導入され、かえって業務負荷が増加する場合もある。そのため、DXを成功に導くためには、現場職員の声を起点としたボトムアップ型のアプローチが極めて重要である。

当院では、救急外来患者に対する紙ベースの問診票の運用に課題を感じ、看護師と医療事務スタッフ、医療情報部門スタッフが中心となり、タブレット端末によるデジタル問診システムを導入した¹⁾。これまでは紙の問診票に記入された内容を医療事務スタッフが電子カルテシステムにスキャンし、看護師や医師がそれを参照して診察を行っていた。作業にはタ

イムラグが生じ、参照が可能になるまでに時間を要したに加え、患者の記載内容の不備や判読不能な文字など、トラブルも散見された。

一方、タブレット端末を用いたシステムでは、患者自身が診察前の待ち時間にデジタル問診を入力する。選択式の質問項目に加え、患者の主訴や既往歴、アレルギー情報などが自動的に構造化され、入力後はリアルタイムに電子カルテに連携される仕組みである。

この運用により、看護師は患者の主訴を確認しやすくなった。医師も患者の入力内容を確認しながら診察を進めることで、問診の重複が削減され、診察時間の短縮が図られている。また、事務スタッフの入力業務が削減され、業務負荷軽減と医療安全の両立が実現している。

さらに導入後は、患者が来院前にスマートフォンから問診を入力できるようになり、受付業務の混雑緩和や、診察準備